

放射線に関する Q & A

放射線は目に見えません。しかし正しく認識し、対処することで過剰な心配や、無用な被ばくを避けることができます。放射能対策室では定期的に、この Q & A を連載していきます。

監修＝相馬市健康対策
専門部会委員、相馬中
央病院医師
坪倉正治
作成＝放射能対策室



Q1 現在、相馬市で放射線が及ぼす健康への影響はどのくらいあるの？

A1 放射線を出す能力を持つ物質のことを放射性物質といいます。線香花火に例えると、線香花火の火の玉が放射性物質、火の玉から出る火花が放射線です。火花を散らしながら、火の玉はその勢いを失っていくように、放射性物質も半減期によって決まる速度でその勢いを失います。放射性物質の種類（核種）によってその速度は異なり、セシウム 134 は約 2 年間、セシウム 137 の半減期は約 30 年です。今後はセシウム 137 への対応が主体になります。

放射性物質にはセシウム 134、セシウム 137 といった人工の放射性物質とラドンやカリウム 40 などの自然界に存在している放射性物質がありますが、どちらの放射性物質から出る放射線も種類は変わらず、量が同じであればその影響は同じです。

放射線の身体への影響は、その「量」の問題です。1 度に大量の被ばくをした場合（おおよそ 200 ミリシーベルト以上）、白内障や一時的な脱毛、血液を作る能力の低下など健康への悪影響が起これえます。また、100 ミリシーベルト以上の被ばくによって、発がんのリスクが少し高まることも報告されています。

相馬市で現在計測されている追加被ばく量は、そのような値に比べて桁違いに非常に低く抑えられていることがわかっています。市では、外部被ばく検査として個人積算線量計を用いた測定を行っています。平成 27 年度に測定した 2,235

人中（中学生以下および妊婦 1,949 人、高校生以上 286 人）、全員が 1 ミリシーベルトを下回りました。自然に存在する放射性物質からの被ばくは、その場所によって異なります。既に相馬市で生活する上での追加被ばく量は、西日本で生活する際の被ばく量と大差ない程度になっています。

また、内部被ばく検査としてホールボディカウンターによる測定も実施しています。平成 27 年度には、大人 2,185 人、子ども 2,582 人の受診があり、その結果、20Bq/kg 以上検出された方（年間の被ばく量として 0.1 ミリシーベルト弱程度に相当）が、大人で 2 名いましたが、大人全体の 0.1% 以下の人数で、受診者の 99% 以上が不検出でした。食材の汚染は特定の種類に集中しており、出荷制限のかからないような地元産の食材を使用しても内部被ばく量が増える状況にはありません。ちなみに、我々は日々摂取する野菜に含まれる自然のカリウム 40 から年間 0.2 ミリシーベルト程度被ばくしており、その量は野菜を食べる量によって変化します。そしてこの程度の放射線が健康に影響することはありません。

これらの結果から、現状の相馬市内で生活するうえにおいて、内部被ばく、外部被ばくは共に十分に低い状況を維持しており、健康被害を考えるレベルにはありません。追加被ばく量は年々減少傾向ですが、継続的に自身の追加被ばく量が低下していることを確認し続けることが、健康対策として大切です。平成 29 年度も外部被ばくおよび内部被ばく検査を実施しますので、ぜひ、測定していただきますようお願いします。

出典：▽除染情報プラザ▽環境省▽放射線の影響を、どう考えればいいのか？▽市ホームページ

●問い合わせ先 放射能対策室 ☎ 37-2270

自家消費野菜などの放射性物質測定結果

● 2月分 ▽測定件数 16 件

（内訳：野菜 7 件、果実 2 件、その他 7 件）

▽基準値を超えた食品 1 件

（内訳：柚子 1 件）

●相馬市で出荷制限などを受けている食品（2月6日現在） ▽くさくさ（ごみ）

▽たけのこ▽ふきのとう（野生）▽ぜんまい▽たらの芽（野生）▽原木しいたけ（露地）▽原木なめこ（露地）▽野生きのこ▽こしあぶら▽うど（野生）▽牛（県の定める出荷・検査方針に基づくものを除く）

※最新の情報は、福島復興ステーションホームページ内の「農林水産物の緊急時環境放射線モニタリング 結果【詳細】」で確認ください。

https://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/non-kekkah.html

◎これまでの食品の検査結果（相馬市ホームページ）

http://www.city.soma.fukushima.jp/housyasen/index.html

●問い合わせ先 放射能対策室（☎ 37 2 2 7 0）